

2025年度 学校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

報告者 部長 林 武宏

I 自己評価

1. 本校の教育目標

「校訓」知性・根気・友愛

2. 本年度の重点目標

- 1) 対話による集団形成と合意形成の質的向上
- 2) 各教科の対話実践を通じた思考力と発信力の育成
- 3) (ASD クラス)「豊かに生きるために」を観点とした生活教養の充実

3. 重点目標についての評価(A~D)と取り組み状況や課題

A・・・達成できた B・・・概ね達成できた C・・・達成が不十分 D・・・達成できていない

1) 対話による集団形成と合意形成の質的向上(A)

対話を重点目標にして2年目の今年度、HRや委員会活動の場において、単なる多数決による性急な解決を避けるべく、対話を通じて全体の合意へと至るプロセスを重視した指導を昨年度以上に年間通して徹底した。1年生においては、入学当初、言葉による表現力の幼さや他者への共感力の不足から、相互理解の難しさを生徒自身が感じる場面も散見された。そこでまずは、生徒が否定される不安を感じることなく自分の思いを表明できる心理的安全性の高い環境づくりに注力し、小グループでの共同作業を頻繁に取り入れることで、他者の視点に直接触れる機会を創出した。相互理解に不適切な発言が見られた際にも、単にそれを咎めるのではなく、具体的な状況を例に挙げながら望ましい対話の在り方を丁寧に説くことで、生徒が自らの言動を客観視し、内省を深められるよう粘り強く働きかけた。こうした土台づくりの結果、生徒たちの間には、自分とは異なる意見であってもその背景から理解しようと努める、深い他者理解の姿勢が定着していった。この積み重ねは、2、3年生においてさらに大きな実を結ぶこととなった。クラス委員を中心として「誰も置き去りにしない実りある対話」という意識が自律的に共有され、教員の指示を待たずとも生徒自らが納得のいく着地点を模索する姿が、学校行事の端々で顕著に見られた。例えば球技大会では、勝利至上主義に陥ることなく、運動の得意不得意にかかわらず全員が役割を持って活躍できるチーム編成を対話の積み重ねから導き出した。また、合唱コンクールの練習過程においてモチベー

ションの差が表面化した際も、反発し合うのではなく、それぞれの抱える葛藤や温度差を共有し合うことで全員が前を向ける「納得解」を見出すなど、相互理解に基づく合意形成の質は飛躍的に向上した。このように、対話を単なる技術の習得に留めず、集団の連帯感を高めるための文化として昇華させたことは、生徒たちの精神的な自立を促す大きな成果となった。

2) 各教科の対話実践を通じた思考力と発信力の育成(A)

各教科の授業実践においては、自らの思考を深めながらそれを他者と分かち合う「対話の工夫」を教育活動の核として重点的に推進した。単なる知識の伝達に留まらず、対話を通じて多角的な視点から事象を捉え直すプロセスを重視することで、質の高い学びの実現を図った。独自の教科である「生命科」においては、SDGs(持続可能な開発目標)を題材とした発表や質疑応答の場を設け、地球規模の課題を自分事として捉えながら、論理的な根拠に基づいた主張を展開する力を磨いた。また、数学科では一つの解に辿り着くまでの多様なアプローチを共有し、理科では実験考察の比較検討を行うことで、自分とは異なる思考の筋道を受け入れ、自らの論理を再構築する柔軟性を養った。英語科における「トリオ・ディスカッション」の活動も、即興的な発信力と同時に、他者の意図を正確に汲み取る受容的な姿勢を育む一助となった。特に3年生においては、日々の具体的な問題解決に向けた話し合いの中で、相手の立場を慮った言動や、状況に応じた適切な言葉選びに著しい成長が認められた。他者との対話を重ねることは、翻って自らの内面を見つめ直す「自己対話」の深化を促し、それが結果として他者との豊かで実りある人間関係の構築へと結実した。これらの活動が形骸化することなく、生徒が主体的に「対話の価値」を実感できるアクティブラーニングへと昇華された背景には、指導者の適切な関与がある。教員が議論の推移を注視し、必要に応じて助言や軌道修正を行う伴走者としての役割を果たすことで、生徒は安心して思考を広げることができた。一年間のこうした積み重ねは、論理的伝達力と多様な価値観を尊重する態度の双方を、生徒の内に確かな資質として根付かせることにつながった。

3) (ASDクラス)「豊かに生きるために」を観点とした生活教養の充実(A)

将来の社会自立を見据えたキャリア教育の一環として、本校では「人間関係の豊かさ」と「心の豊かさ」の二軸にフォーカスした多角的なカリキュラムを展開した。単なる就労準備に留まらず、生涯にわたって自らの生活を主体的に彩り、他者と調和して生きるための基盤を築くことを主眼とした。正課授業として位置づけられている「生活教養」においては、お茶の丁寧な淹れ方や季節ごとの伝統的な風習、さらには集団レクリエーションを通じた対人マナーの習得など、日常生活に根差した教養を深めた。また、多様な「技能」の授業では、ギター演奏やステンドグラス制作、切り絵、刺し子といった幅広い表現活動を行っている。これらの活動は、一人で没頭し内面を充実させる余暇の在

り方を提示すると同時に、完成した作品や演奏を他者と分かち合う喜びを創出する場となった。こうした経験を通じ、生徒一人ひとりが自らの「得意」や「好き」を再発見し、自己肯定感を高める重要な契機となった。クラスおよび学年活動においては、1年生では「様々な実践をくり返し、経験値をアップする」を、2年生では「経験で得た力のさらなる向上」を、そして3年生ではそれらの力を背景とした「社会とのつながりへの意識強化」をそれぞれ重点目標に据えた。段階的に設定された楽しみを伴う新しい体験の反復は、将来の生活を豊かに構想するための確かな糧となっている。また、校外での宿泊行事等においては、これらの日常的な学びが実践的な力として発揮された。普通部クラスの生徒との間でも円滑にコミュニケーションを図り、協力して班活動を楽しむなど、集団適応能力の面で極めて顕著な成果を上げることができた。

4. 総合的な評価と今後の課題

今年度は教育環境の質的向上が一段と進み、生徒一人ひとりのウェルビーイングを高める取り組みが強固に構築された一年となった。その象徴的な取り組みとして、自身の心理状態や感覚の過敏さに合わせて自由に利用できる「カームダウンエリア」を各階に新設した。これにより、生徒が自らの情緒をセルフケアできる環境が整い、学校生活における安心感が飛躍的に向上した。加えて、図書テラスの什器を一新し、開放的な読書空間を整備したことは、知的好奇心を刺激するだけでなく、生徒たちが感性を磨くための場を提供することとなった。こうした「知・徳・体」のバランスのとれた成長を支えるための細やかな環境整備は、生徒たちの活動を根底から支える重要なインフラとして機能している。

また、校外教育活動は従来のものに加えて、新規の活動も導入した。文化庁後援事業であるオーケストラ鑑賞教室に全校で参加し、新日本フィルハーモニー交響楽団の演奏に触れた。この取り組みは次年度以降も芸術鑑賞の活動を検討する契機となった。また、東京国立博物館とのパートナーシップ提携により、1年生において博物館実地での学びを試行した。ASDクラスにおいては3学年合同での宿泊校外活動を初めて実施。酪農体験を行った。次年度以降もASDクラスの縦割り活動を重視し、合同での宿泊活動を継続していく。

学習面においては、日頃の真摯な取り組みが具体的な成果として結実した。普通部クラスの英語検定においては、3年生の76%が準2級以上、95%が3級以上という極めて高い取得率を記録し、日本英語検定協会より6回目の「優秀団体賞」を授与される榮譽に浴した。また、全国学芸サイエンスコンクールにおける学校賞の7年連続の受賞は、本校の探究型学習の質の高さを対外的に証明するものとなった。

こうした学術分野での躍進に呼応するように、部活動においても陸上競技部、体操競技部、ダンス部などが全国・関東レベルの大会で輝かしい成績を収めるなど、生徒の主体性は多方面で華々しく開花した。進路指導においても、個々の特性と志向に寄り添っ

た指導が実を結んでいる。各教科専科による3科の指導へと変更した「特別進学学習」の実施や、きめ細かな習熟度別授業による万全な校内指導体制を構築した結果、卒業生は全員が各自の将来の目標に照らした上級校への進学を果たすことができた。これは、単なる学力の向上のみならず、生徒自身が自らのキャリアを主体的に選択し、切り拓こうとする意志の表れであると捉えている。

今後は、これまでの学年段階に応じて培ってきた「対話」と「合意形成」の力を土台としつつ、より複雑化・多様化する社会課題に対しても主体的に関与し、解決の糸口を模索できる実践的な能力を養うことが求められる。個々の進度に合わせた「個別最適な学び」と、多様な他者と知を共有する「協働的な学び」を、より高い次元で両立させていくことが次なる重要な課題となる。本校はこれからも、生徒が未来を切り拓くための確かな力を育むべく、絶えざる教育改革を推進していく。

Ⅱ 学校関係者評価

- 1) プランノートを通して教員から各生徒に対し、丁寧なアドバイスや励ましの言葉、共感の言葉があり、教員と生徒間の意思疎通が図れていると感じた。また、生徒のモチベーションにもつながっている。また、学校行事では、生徒主体で進められていることがわかり、教員のサポートの多大さを感じた。
- 2) スピーチコンテストを通して、自分の考えを知ってもらい、みんなの考えを知る機会となり人間関係の構築に有効であると感じた。また、自分を表現する力にもつながっている。
- 3) 1年間の学校生活を振り返ると、日々の学校生活の一つ一つが「豊かに生きるために」というテーマに基づいて構成されていたカリキュラムだったと今改めて実感している。宿泊学習や学校行事、また校外学習の機会がたくさん設けてあることで、経験値が上がり、自信がつき自立心が伸びた。
- 4) 座学の勉強だけでなく、個人の興味関心を教員がとても評価してくれ(子どもは今年、料理への興味がとても高まりお手伝いのスキルアップにも繋がった)、学校での実習内容も情報共有がされ、将来の余暇活動に向けてのモチベーションが上がった。
- 5) A～E組クラスの垣根なく過ごしている学校生活がとても温かい環境だった。1年生箱根学習ではABの友達と同部屋で宿泊するという経験が本人にはとても嬉しかったようであり、この一年友達との関係性がコミュニケーション力の向上に繋がっているととても感じた。
- 6) 保護者研修会でスライドを用いた話は毎回とても興味深く、対面ならではの良さを感じた。特にてんかん発作についての講義は当事者としてはありがたい内容だった。学校通信の配布も毎回楽しみにしている。冒頭の校長による記事は特に学びにつながる事も多く、保護者のお母様方からも同様に毎回楽しみにしているという声を何人も頂いていた。

- 7) SNSとの向き合い方、闇バイト、テクノロジーハラスメントなど、近年の社会課題に関する最新情報を外部講師の方から学ぶ機会があったようだが、1年に1度行うなど情報のアップデートと深掘りを学年追うごとにお願ひできればと思う。中学生に入り興味分野もこの1年で広がったが、ネット上の情報によるエコチェンバー現象やフィルターバブル現象は子どもたちの視野を狭める可能性があり、学校で継続して正しい知識を共有して頂くことに大きな効果があると考えている。
- 8) 小学校同様、中学校でも性教育の内容がやや不足している印象がある。正しい知識を得ることは、情報リテラシーの観点からもトラブル防止につながると思う。近年、同年代による盗撮や画像共有の事件が増えていることもあり、当校だけではなく全国的に喫緊の課題ではないかと感じている。
- 9) 筆記テストのある教科について、教科ごと・3教科・5教科などの順位を数値でご提示いただくと、子ども自身の受け止め方が明確になり、学習意欲や競争心の向上につながると思う。今回は担任教員に教えていただいたが、毎回開示していただくと大変ありがたく思う。
- 10) 学校行事や部活動が活発で、生徒たちが学年を越えて関わる機会が多く、学校全体に活気があると感じた。特にスポーツ大会や学園祭などは、生徒たちが主体的に取り組んでおり、よい経験になっていると思う。
- 11) 知・徳・体のバランスを大切にされた教育が行われており、勉強だけでなく、人としての成長につながる機会が多いと感じている。英検や探究活動、海外研修など、幅広い経験ができる環境は大変ありがたい。また、インクルーシブ教育の観点でも、宿泊学習などを通して寝食を共にする中で、お互いの個性や違いを理解し合い、生徒同士がともに成長できる機会になっていると感じた。
- 12) ASDクラスにおいては、少人数制であることに加え、担任や副担任など複数の教員の目で見いただくことで、習熟度別の授業の中でも理解度に差が出やすい特性に十分配慮した体制となっていたと感じた。
- 13) 受験に向けた進学指導については、個々の目標に合わせたサポートが手厚く、安心感がある。また、特進クラスでは、周囲の仲間が努力している姿が刺激となり、お互いに励まし合いながら頑張れる環境があることも、大きな支えになっていると感じた。長子で初めて受験を経験する家庭にとっては、中学3年生の4月の段階で、これからの1年間の流れや受験までのロードマップが見えるような個人面談の機会があると、本人・学校・保護者が同じ方向を向いて進めていきやすくなるのではないかと思う。
- 14) 自主学習を支えるプランノートには、家庭学習を支える仕組みが整っている点もありがたく感じている。毎日の学習習慣づけだけでなく、先生方とのコミュニケーションにもつながっていると思う。また、プランノートを通して学校と家庭の様子を共有することで、課題に対して先生と保護者が同じ方向性で取り組むことができたと感じている。